

eポートフォリオの理論と実際

森本 康彦*

E-Portfolios: Theory and Practice

Yasuhiko MORIMOTO*

キーワード：eポートフォリオ，ポートフォリオ評価，真正な評価，eポートフォリオ・マネジメント・システム

1. はじめに

近年、欧米の大学を中心に多くの機関において、教育分野での電子ポートフォリオ（以下、eポートフォリオ^(注1)）の利用が目され、急速に拡大してきている。

その背景には、学習と評価のパラダイム転換が大きく関係している。学習理論が、行動主義、認知主義、構成主義、社会的構成主義へと移行し現在に至る中、表1に示すように学習と評価に関する考え方や方法等も変化してきた。

表中の行動主義、認知主義の時代においては、学校という閉じた小社会における学習指導のためにつくられた課題（学校化された課題）を用いた、教師が学習者に対して絶対的な知識を伝達するための学習指導（学校化された学習）が求められていた。また、評価方法としては主に客観的能力測定法であるテストが用いられ、その結果のみが重視された。

しかし、構成主義の台頭と共に絶対的な知識観が崩壊し、学習活動や課題、評価方法等が現実的なものでなくてはならないという「真正性（authenticity）」が強調されるようになる⁽¹⁾。真正な学習とは、「ありのままの学習（learning in wild）」を意味し、現実的な課題（真正な課題）と、現実的な文脈を持った学習内容（真正な文脈）のもと、現実に即した活動（真正な

活動）によって進められる学習者による自律的な学習である⁽²⁾。

真正な学習では、必要な知識を収集・総合し適切な判断を下しながら課題解決を図る力が必要とされるが、この能力はテストだけで評価することは不可能であり、継続的に学習者の学習を多面的に評価すること（真正な評価）が求められる。また、真正な学習・評価においては、学習の中に評価が埋め込まれていることが特徴である⁽³⁾。つまり、学習者の学習のプロセスにおいて評価が学習の一部として組み込まれており、学習と評価を切り離すことはできない。

真正な評価においては、学習活動のプロセスを通じた継続的な学習成果物や学習履歴データ等の記録（以下、学習の証拠）を重視し、これらを用いて学習者のパフォーマンスを評価する。この際に、学習の証拠となるものがポートフォリオであり、真正な評価には必須なものとなった⁽⁴⁾⁽⁵⁾。従来は、紙ベースのものが用いられていたが、現在は電子化されたeポートフォリオが主流となってきている。

eポートフォリオは、電子的に扱うことができるため、学習のプロセスにおいて、学習者の学習成果物や記録をeポートフォリオとして収集し、ネットワーク等を介して直接それらを実践活動に用いることができる。つまり、eポートフォリオを学習に取り入れることによって、表1にある、セルフ・アセスメント（自

* 富士常葉大学環境防災学部（College of Environment and Disaster Research, Fuji Tokoha University）